38
光村
小国426

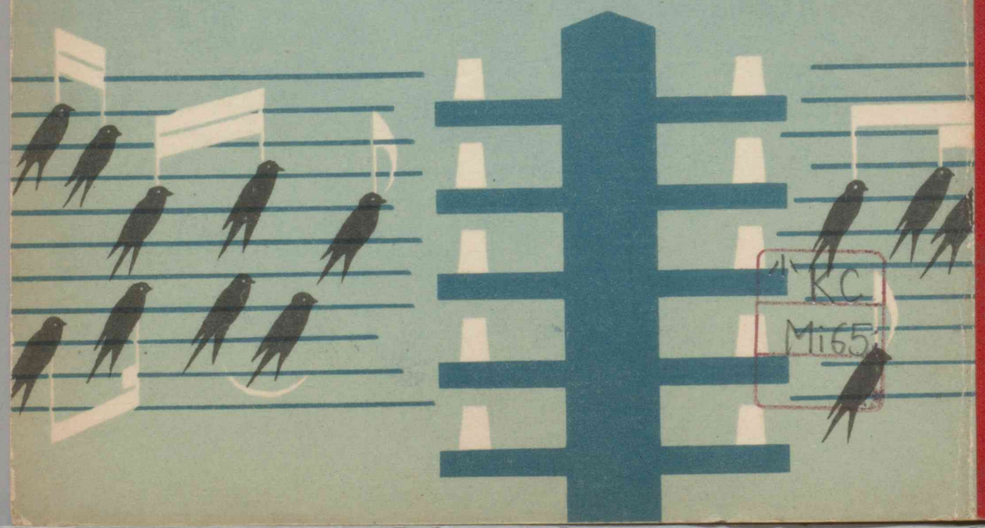
教育学部
資料室

垣内松三 著

そよ風

新国語 四年上

文部省検定済教科書



KC
Mi65

60322
教科書文庫
6
810
34-1950
01304
49752

寄贈
教科書文庫
6
810
34-1950
0130449752

昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校国語科用

そよ風

広島大学図書
0130449752

新国語 四年 上

廣島大學
教育學部圖書

中央図書館

指導者のために

(一) この本は、地域社会の現在と過去・交通通信に取材し、その基本的な構造と運関の発達について注意をうながしながら、身心の発達に即して国語学習における諸作業を自発的創造的に導くように組織し編集してある。特に言語活動を中心として理解と表現の学習が興味のうちに有機的発展的に行われるように努めた。

(二) この本の内容は次の四つの題目に分かれている。

一　明るい村
地域社会の現在と過去との関係を主題として、生活文・伝記・詩を提出し、この学年における言語活動の基本的態度を示すことにする。

二　時は流れる
前課のあとを受けて空間的時間的意識を高めると共に、通信・交通の進歩を配して、物語・生活文・よびかけを提出し、言語生活を多角的に発展させることにする。

三　そよ風
かべ新聞の作製を主題として、その作製過程と作品とを提示し、討議の基本的態度を確立して共同作業による表現活動に導き、新聞に対する理解を深めることにする。

四　夏の夜
この本の趣旨を総合して夏の自然に取材し、生活文・物語などを提出した。さらに生活経験に意識を高め、空間的意識を広げて豊かさ、夏休みにおける学習の心構えを整え

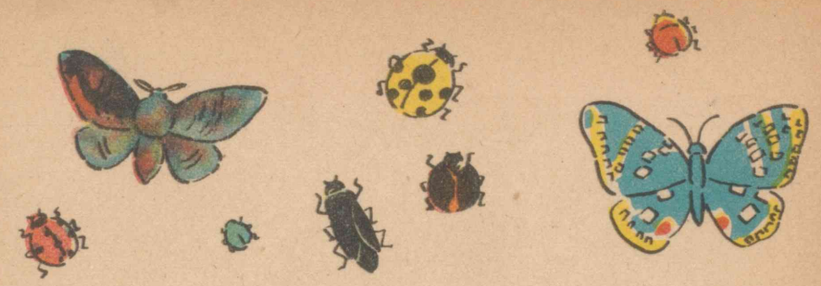
(三) この本に提出した新出語は三二〇語で、毎ページの新語率は二・九一語である。学習の仕方・新語表・使用上の便を図ると共に、文章は敬体口語を主としながら、次第に常体口語にも慣れさせるように留意

(四) この本のさし絵は、学習上重要な位置を占めるので特別な考慮が払われている。

(五) この本の使用期間は、だいたい四月から七月（地方によつては八月）までを目標として、大題目を平均したが、それを固執する必要はない。地方の実情と児童の個人差を考慮して有効に活用されたい。

（右は本書編集の大要である。詳細は新国語指導書を参照されたい。）

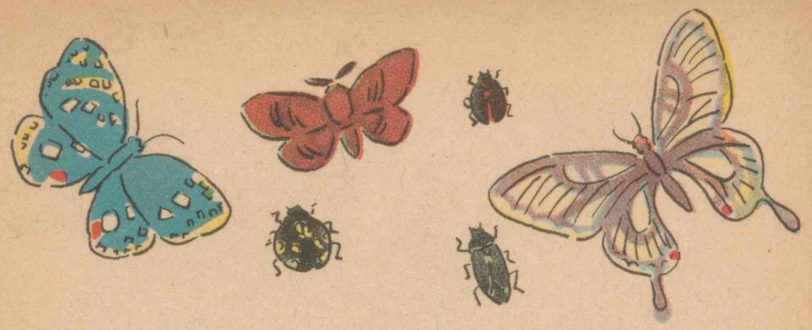
広島大学図書
0130449752



もくろく

一　明るい村……4
(一)　山の上で
(二)　ねていて人を起すな
(三)　送電線

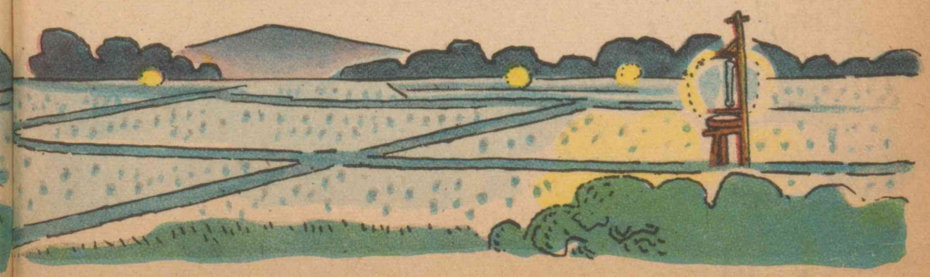
二　時は流れる……29
(一)　なつかしい音
(二)　おじさんの声
(三)　時は流れる



三　そよ風……57
(一)　話しあい
(二)　編集
(三)　そよ風―第一号―

四　夏の夜……79
(一)　ゆうが燈
(二)　こん虫館
(三)　こまと星

学習の仕方
新しいことば
かん字表……111



一　明るい村

(一)　山の上で

まさおは、ゆたかの村に遊びにいきました。

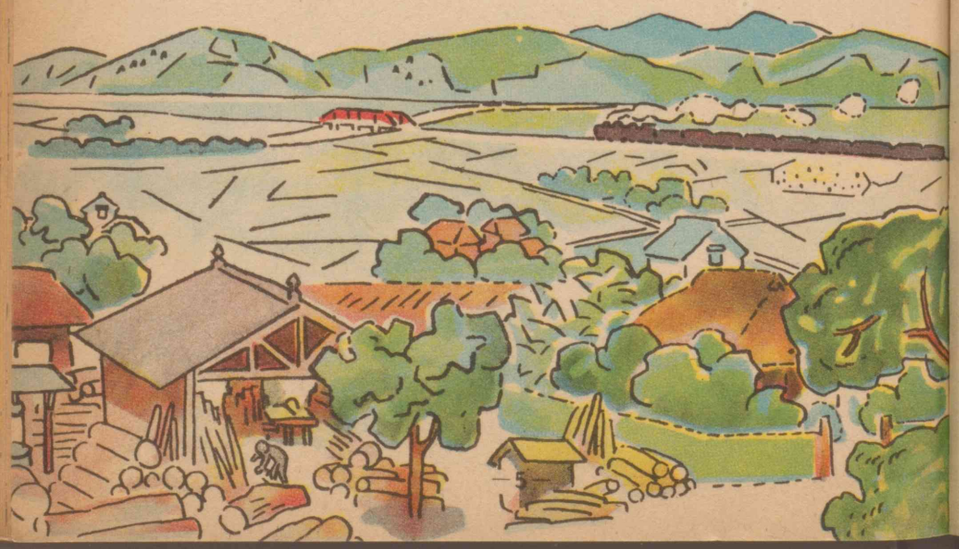
おじさんといっしょに山にいきました。おととし植えたすぎのなえは、しっかりと根をはって、みちがえるほど大きくなっていました。緑色のわかわかしいえだをのばしていました。

日あたりのいいところで休みました。村がひと目に見わた

されていいきもちでした。広い田んぼのむこうを汽車が通っているのが見えました。遠くの大川の水が白く光っていました。

「おじさん、この村は、あの川の西になっているから、川西村というのでしょうか。」

「そうだよ。ぶらくにもそれぞれなまえがあるのだが、みんななまえの起りがあって、調べてみるとなかなかおもしろい。」



おじさんは田んぼの中のぶらくを指さして、
「あのあたりを一本やなぎとよぶのだが、むかし、大きなやなぎの木が一本立っていたということだ。わたしが生れたころは、もう、なかったがね」。
とおっしゃいました。
「おとうさん、駅の近くを十日町というのはどういうわけですか。村の中に町の名がついているので、ぼくはふしぎに思っていましたが」。
と、ゆたかがたずねますと、
「あのあたりは、となりの町に近いので、十日ごとに市がひらかれたものだそうだ。町や村でできた物を、とりかえっ

こをしたわけだ。それで、いつからともなく十日町とよぶようになったらしい。」
と、おじさんが教えてくれました。
まさおは家に帰ったら、じぶんの町のなまえのことも調べてみたいと思いました。
県道にそって、遠くにつづいている電柱のがいしが白く光っていました。まさおが、
「あの送電線は、ぼくの町にきているのと、同じ所からきているのかしら。」
というと、おじさんは、
「そうだよ。あの大川は、まさおの町の中を流れてくる川だ。

あの川の川上に発電所があるのだ。」
とおっしゃいました。
「その発電所なら、いつか、遠足にいって見てきました。」
まさおは、発電所のありさまをゆたかに話してあげました。
サイレンがなりました。駅の近くの製材所でならすのです。
サイレンの音は、おを長くひいて、遠くの山々にひびいていきました。
「さあ、べんとうにしよう。」
と、おじさんがおっしゃいました。
べんとうを食べながら、こんなお話をしました。
「この村も、ずいぶん変ってきたものだ。今は、ああして、

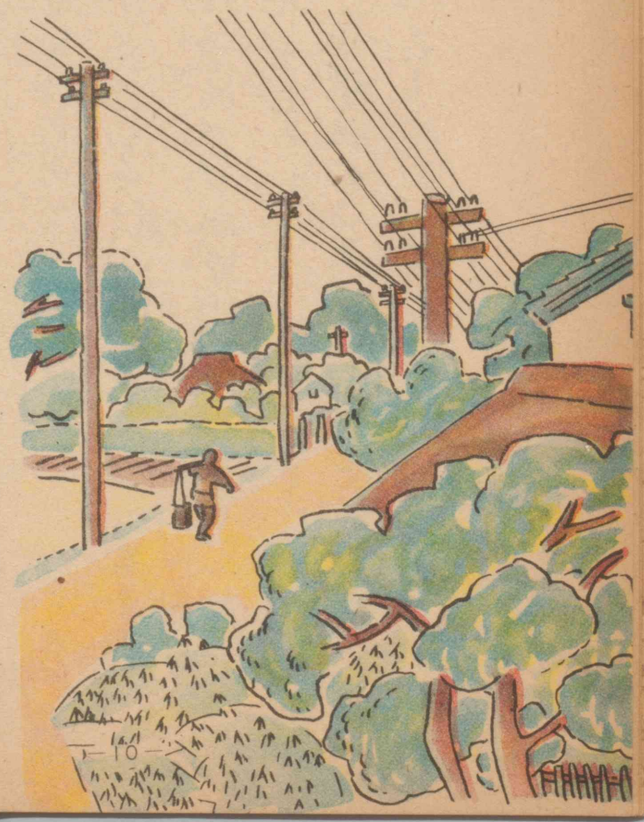
サイレンで正午をしらせてくれるようになったが、もとは、となりの町の花火とか、むこうの森のおてらのかねなどでしらせたものだ。その前は、板木(ばんぎ)といって、あつい板を木のつちでたたいてしらせたものだそうだ。」
「そのころは、電とうもなかったのですね。」
「あるものか。わたしの小さいころは、石油ランプであった。ランプのほやをみがくのが、わたしの仕事だった。」
「汽車はあったんですか。」
「汽車は通ったばかりで、小学生のころは、べんとうを持って、わざわざ見物にいったものだ。電とうなどは、そのずっとあとのことだよ。」

「すると、今は、ずいぶんべんりになったわけですね。」

「べんりになったね。この村に電気がきたというだけでも、仕事のしかたがすっかり変ってきたし、村の人たちの生活もみちがえるようになった。」

おじさんは、にぎりめしを食べながら、

「しかし、世の中がべんりになったからといって、なまけてはいけない。もと、この村は土地がやせていて、たいへん



貧しい村だったそうだ。今は、米も野菜もたくさんとれて、村の人たちはなんの不自由もなくくらしているが、これまでにするために、おじいさんのじぶんにはたいへんな努力をされたものらしい。」

とおっしゃいました。

まさおたちは、おじさんのお話を聞きながら、ふもとの村を見おろしました。

村の家々をおおっている緑色のわか葉は、明るい春の光を浴びてかがやいていました。くろぐろとした土の上に緑のしまをえがいて、麦畑は遠くにひろがっていました。どこからか、のどかな牛の声が聞えてきました。

(二)　ねていて人を起すな

(一)

石川力之助は、県ちょうの役人をやめて村に帰ってきた。おちぶれたじぶんの村を、たてなおさなければならないと思った。

かれの村は、もともと豊かな村ではなかった。明治になって、武士と農民のくべつがなくなり、米のねだんがぐんとあがると、村の人たちはぜいたくをしたり、仕事をなまけたりした。

数年たって、米のねだんがさがりだすと、こんどはがっかりして働く気がしなくなった。土地はやせ、収かくがへる上に借金はふえるばかりであった。

力之助は、このありさまを見て、じっとしていることができなくなった。「役人をやめさせてくれ」と、たびたび願いでて、とうとうききとどけてもらったのである。

村に帰ると、まず、かれは村人のじっさいの生活を調べた。調べてみると、思っていたよりひどいものであった。借金をしていない家は、ほとんどないといってもいいほどで、それを返すあてがないばかりか、たくわえの米さえもないありさまであった。

——どうして、この村をたてなおすか。

力之助は、田の広さと、毎年の米のでき高を調べてみた。そして、肥料の入れ方と村人の働きによっては、もっともっとたくさんの米がとれることがわかってきた。

かれの調べたところでは、七年間ぐらいで、村がたてなおされるみこみがついた。そのためには、まず、村人の心をふるいたたせ、力を合わせて仕事にせいをだすよりほかはないのだが、そのことを村人によくわからせ、実行にうつすこと

は容易なことではなかった。

（二）

ある年のことである。

春になっても雪がとけなかった。村人は心配した。ひがんがすぎると急にあたたかくなった。みるみる雪がとけて、いつもの年より早くさくらがさいた。さいたと思うと、こんどは急に寒くなって、みぞれや雪がふりだ

した。さくらの花は、うすぎたなくしぼんで散ってしまった。芽をだしたばかりのいねのなえが成長をとめてしまった。

きぎんがくる。— 村人は青くなった。これまで、きぎんのためにどれだけの人が死んだか、きぎんがどんなにおそろしいものであるか、村人はよく知っていたからである。

力之助は、もう、だまってはおられなくなった。

村人を集めて、

「もし、このまま、きぎんがきたらどうするか。」

と、初めて口をきった。

「きぎんにそなえて、食物をたくわえておくことは、天気がよくても雨具を用意しておくことと同じことだ。— といっ

ても、いまさらどうにもしようがないが……。」

村人は、たがいに顔を見合わせるばかりであった。

「働くことだ。」

力之助は、力をこめていった。

「借金などを調べて歩いたので、かげで悪口をいわれていることを私は知っている。しかし、私は村をたてなおすために役人をやめたのだ。私の気もちが、みんなにわかってもらえるだろうか。」

村人は、力之助の顔をみつめている。

「私の考えでは、七年で村がたてなおされると思うのだが。」

といって、かれは七年計画のことをくわしく話して聞かせた。

村人の目は、しだいにかがやいてきた。

「米を多くとるためには、肥料を入れなければならない。肥料を入れるためには、それだけ働かなければならない。なによりも、私の田を見てください。」

力之助のことばに、村人はふるいたった。

（三）

午前三時。

力之助は、雪のふりつもったおかの上に立って、力いっぱい板木をたたいた。去年からたたきつづけてきた板木は、まん中が少しくぼんでいた。

カーン、カーン、カーン。

板木の音は、おかの下の、まだねむっている村にひろがっていった。雪におおわれた村の家々には、ぽつぽつとあかりがつきはじめた。まだ、ねむっている家もあった。

板木を打ちおわると、力之助は雪の中を村の方へおりていった。一け

ん、一けんと、見まわっていくのである。そして、貯金の通ちょうをくばってまわるのであった。

力之助は村人のために、いまの農業組合のようなものを作ってやり、じぶんが先にたってせわをしてやった。

「やあ、おはよう。よくせいが出るな」

仕事にかかっている家には、声をかけてはげましてやった。まだねている家には、戸のすき間に、だまって通ちょうをさしこんでおいた。

村の女には、着物のぬい方、料理の作り方、子どもの育て方などを教えた。

また、学校が休みの時には、村の子どもたちをじぶんの家

に集めて、書物を読ませたり、書き方を教えたり、わら仕事をさせたりした。そして、作った物は買いあげて、その金を貯金してやった。

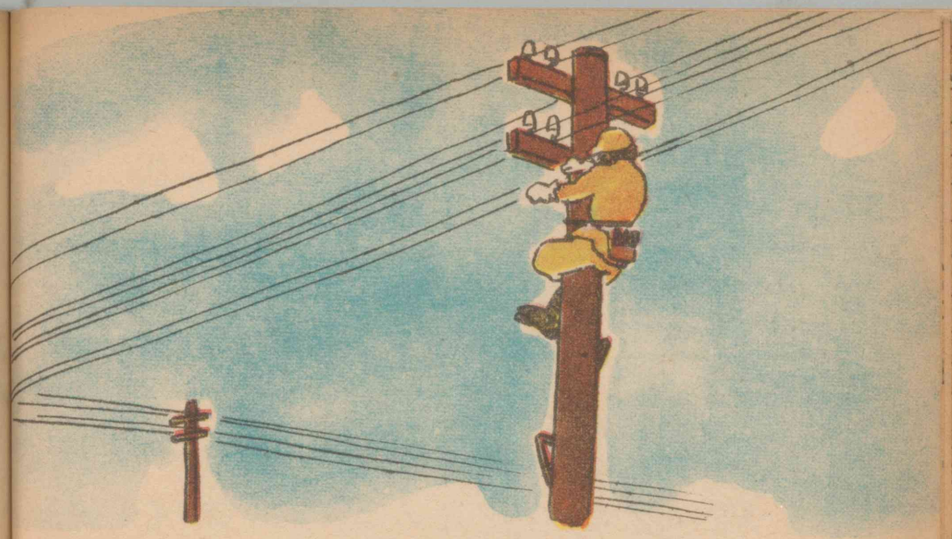
みんなの働きで、村はきれいからまぬがれた。そして、だんだんたちなおっていった。

力之助は、あちこちの村や、他の県からたのまれて話をしにいくようになった。農村を救うために、かれは喜んで出かけていった。農夫のすがたのままでどこへでもいった。

「ねていて、人を起すな」

これは、かれの守りとおした心がけであった。

かれは死ぬまで、この心の板木を打ちつづけたのである。



(三) 送電線

○

からだをひもでゆわえつけ、
高い電柱の上で、
送電線の修理をしている人。

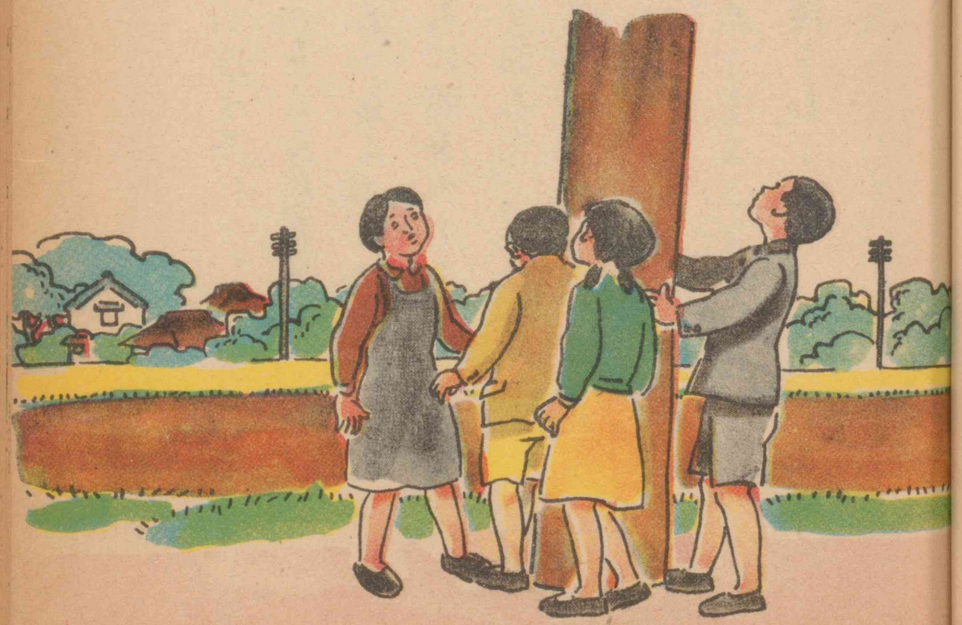
「おじさん、遠くが見えるでしょう」。
「あ、アメリカが見えるよ」。
下の方で、どっとわらう子どもの声。

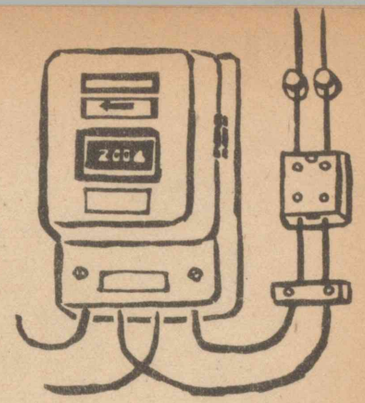
○

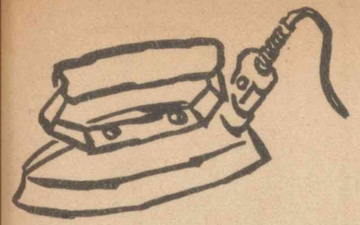
電柱に耳をあててごらん。
ほうら、ね。
なにか聞えるだろう。

遠くの方から、
ゴーッと、つたわってくる音。

風の声だろうか。
ほうら、ね。
なにか聞えるだろう。



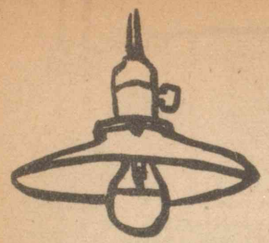


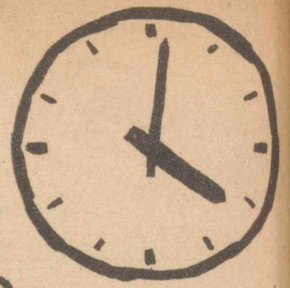


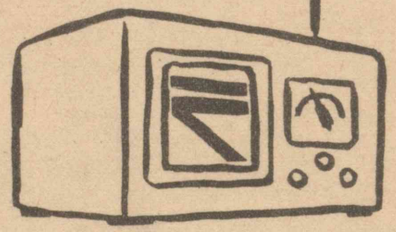
○

のき下から、
家の中にはいりこんだ電流が、
屋根うらをあっちこっちはいまわり、
ところどころに顔を出しては、
スイッチのところで、
じっと待ちかまえている。

ニクロム線のうずまきをかけまわって、
やかんのお湯をわかし、
アイロンに流れこんでは、







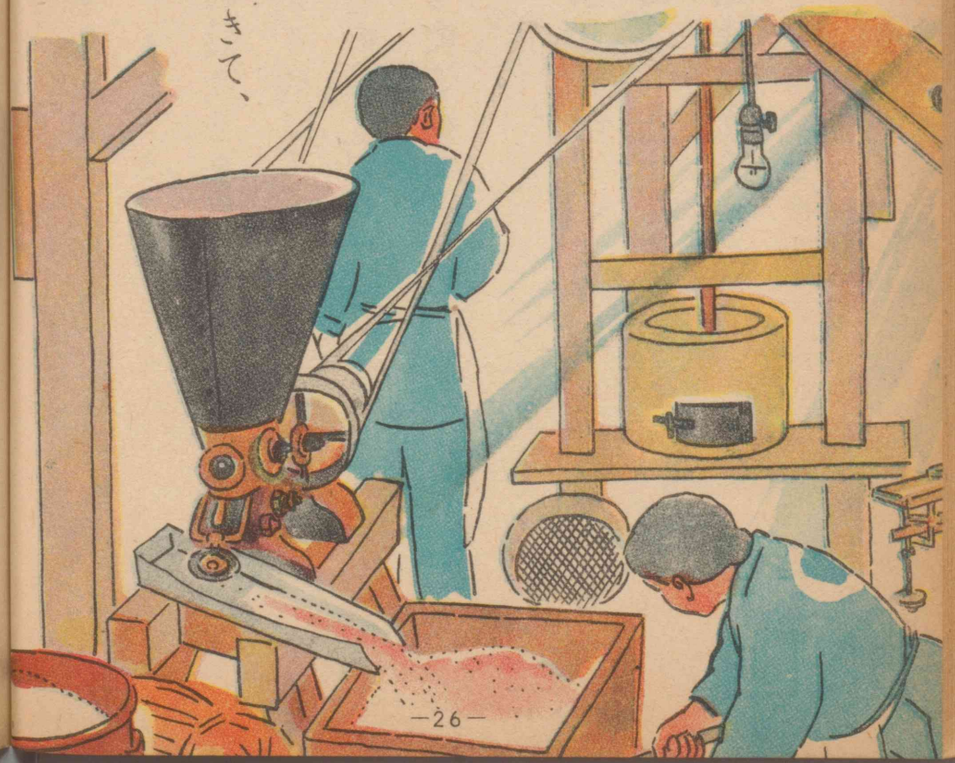
ズボンのしわをのばす。

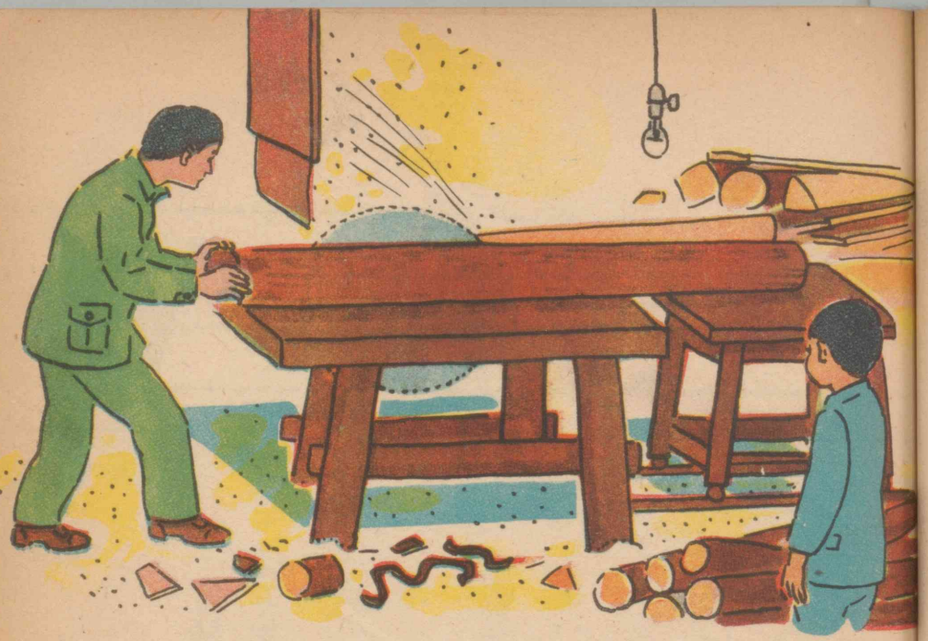
とけいのはりをまわしては、
学校にいく時こくをしらせ、
ラジオの中にもぐりこんでは、
ゆかいな歌を歌う。

へやにあかりをともしては、
食たくのごちそうを照らし、
つくえの上に光を送って、
夜のおさらいをさせる。

○

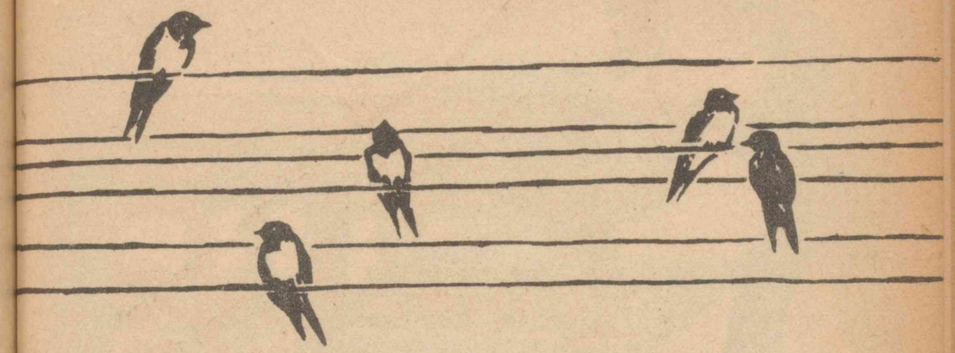
ぐるんぐるんと、
まわっているベルト。
ざあざあと、
げん米がそそぎこまれる。
さらさらと、
白米が流れ出てくる。
みるみるつもっていく。
まどから夕日がさしこんできて、
白米の山を、
もも色にそめる。





○

まるたをレールに乗せて、
ぐっと、おしだしていく、
おじさんのたくましいうで。
ジャーンとさけびをあげて、
まるのこが、
まるたをかんでいく。
火花のように、
飛び散るのこくず。
新しい板が、
はぎとるようにとり出される。



○

電話線に
つばめがとまっているよ、
がくふのように。

電話線の中を、
今、どんな話し声が流れているだろう。

「つばめさん、
なにか聞えるかい。」

二　時は流れる

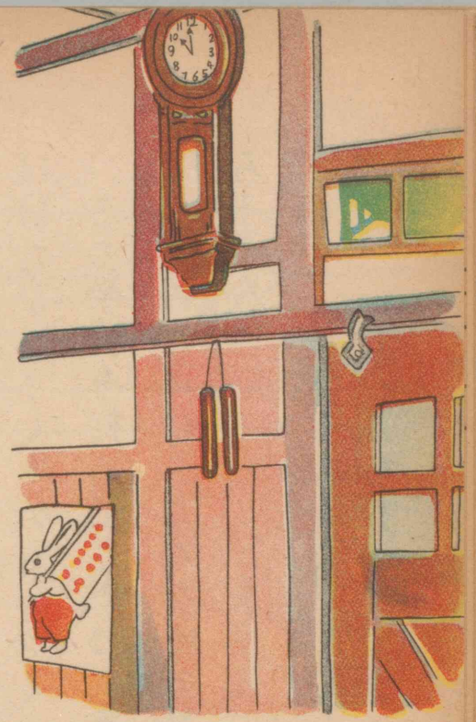
(一)　なつかしい音

学校のげんかんをはいると、正面のかべに大きなとけいがかけてあります。その下に、ふりこのようなかっこうで、古ぼけたひょうし木がさがっています。それが、わたしです。

この学校を初めてたずねて来る人は、だれでも、

「なんのために、こんな所にひょうし木などさげておくのだろう。」

というような顔をして、ふしぎそうにわたしを見ます。



むりもないことです。わたしのからだときたら、あちこち、虫に食われている上に、もくめもわからないほど黒ずんでいるからです。だれだって、学校のげんかんの、しかも、正面のかべにかけておくような品物ではないと思うにちがいありません。

さっきも、この学校をたずねてきた人が、わたしのことを校長先生にきいていました。校長先生は、

「あれは、この学校の最初の校長先生が、じぶんでお作りになったものです。先生は、あのひょうし木で、時間の始まり

や終りをしらせてくれたものでした。わたしも、その音を聞いて勉強したひとりです。思い出の深いひょうし木ですから、記念のためにこうしてかけておくのです。」

と説明されました。

校長先生のやさしい顔を見ていると、わたしは、先生が子どもだったころの校舎を思いださずにはいられません。

そのころは、今のように大きな建物ではなく、教室がたった二つしかない平屋でした。運動場もせ

まくて、休み時間には、生徒たちは、うらの山や遠い小川まで遊びにいったものです。勉強が始まるころになると、わたしを作ってくれた校長先生が、校庭に出ていって、

「おうい、始めるよう。」

とさけんで、わたしをカチカチと鳴らしました。

その音を聞きつけて、そでやすその短い着物を着た子どもたちが、ぞうりの音をぱたぱたさせながら集まってきます。今の校長先生は、いつも一番先に走って来る生徒でした。

そのうち、校長先生もかわり、先生や生徒の数もふえ、校舎も大きくなってきますと、わたしは校長先生の手からほかの先生の手に、それから、小使さんの手にとうつっていきま

したが、時をしらせるのは、やっぱり、わたしの役目でした。

ところが、ある朝のことです。

「もう、そろそろ始まるころだな。」

と思っていると、とつぜん、カンカンカンというかねの音がひびいてきました。へんだなと思っているうちに、その音で学校が始まったことがわかってきました。その時、わたしはじぶんの役目の終ったことを知ったわけです。むねのふさがるような悲しい思いをしました。

物置のすみにくらさねばならなくなってから、なん年たったことでしょう。ほこりをかぶったまま、長い間、わたしはねむっていました。

そのわたしをみつけてくれたのが、今の校長先生です。ほこりをはらって、なつかしそうにわたしをカチカチと鳴らしてくださいました。子どものころをなつかしく思いだされたのでしょう。わたしも、久しぶりにじぶんの音を聞いて、うれしくなりました。そして、

「あ、この先生だな、いつも一番先に走ってきた、あの子は。」

と、子どものころの校長先生を思いだしました。

しばらく、校長先生のつくえの上に置かれたわたしは、ある日、講堂に持っていかれました。

「わたしは、この音を聞いてよく勉強をしたものです。」

校長先生は、ずらっとならんでいる生徒の前で、わたしを

たたいて鳴らしてみせました。

その日は開校記念日だったのです。校長先生が、わたしのことを生徒に話して聞かせたのでした。わたしはうれしくて、思いっきりいい音をひびかせたつもりです。

その後、わたしは今の場所をもらいました。そして、開校記念日には、わたしが鳴らされることにきまりました。

わたしが時をしらせたころの生徒は、みな大きくなっています。学校をたずねて来るようなことがあると、なつかしそうにわたしを見あげてにっこりします。入学する子どもをつれてきた父親や母親が、わたしのことを、子どもに話して聞かせているのをみかけることもあります。

せんだっては、
「おや、あの人にも見覚えがあるぞ。」
と思っていると、その人は、今、町長さんになっているということがわかりました。いつも、青いふろしきに、本をきちんとつつんで来る子どもでした。
学校は二階建になり、運動場は広くなり、わたしの音では全校にひびきわたりそうもありません。あのころは、じぶんのことばかり考えて悲しかったが、こんなにりっぱな学校になっていくのを見ては喜ばずにいられません。かねがベルに変っていますが、近くサイレンになるという話も聞きました。
開校記念日がくるのを、わたしはいつも待っています。

(二) おじさんの声

よしこが学校から帰って来ると、おかあさんが電話の受話器を持ったまま、
「はやく、ここへいらっしゃい。」
と、手まねきをなさいました。
よしこが急いでいくと、おかあさんは、
「はい。……はい。……承知いたしました。では、どうぞおからだに気をつけて—。もしもし、今、よしこが学校から帰ってきましたから、ちょっと声をかけてやってください。」

といって、受話器をわたしました。

「東京のおじさんよ。あす、アメリカへおたちになるんですって。」

「アメリカへ。」

よしこはびっくりして、おかあさんの顔を見ました。その時、おじさんの声が受話器を流れてきました。

「もしもし、よしこさん。」

「はい、よしこです。おじさん、アメリカへいらっしゃるん

ですって。」

「あすの夕方、飛行機でたつことにしたよ。三か月の予定だから、夏休みには会えるかもしれないね。」

「おじさん、今どこにいらっしゃるの。」

「どこって、東京さ。東京の事務所からかけているんだよ。」

「まるで、この町の中からかかっているように聞えるわ。」

おじさんのわらい声がしました。それにまじって、自動車のけいてきらしい音も聞えてきました。

「よしこさんの声もよく聞えるよ。このつぎは、アメリカから電話をかけてあげようか。」

「ええ、でも、こんなによく聞えますか。」

聞えるとも。おみやげ話をたくさん持って帰るから楽しみに待っておいで。」

「はい。」

「しっかり勉強するんですよ。では、いってきますね。さようなら。」

よしこは、もっとお話をしたいと思いましたが、おじさんのことばにさそわれて、

「さようなら。」

といって、電話をきってしまいました。

まだ、おじさんの声が耳の底に残っているような気がしました。けいてきらしい音は、おじさんの事務所の前を通りす

ぎた自動車かもしれません。そう思うと、遠い東京の町が、急に目の前にうかんでくるように思われました。

よし子が、

「おかあさん、飛行機で、アメリカまではいく日ぐらいかかるでしょう。」

とききますと、おかあさんは、

「そうね。とちゅうの島によって、二日もあればいけるでしょう。」

とおっしゃいました。

「おとうさんに、おしらせしなければいけませんね。」

「そうなのよ。東京にたちよって来るとはおっしゃっていた

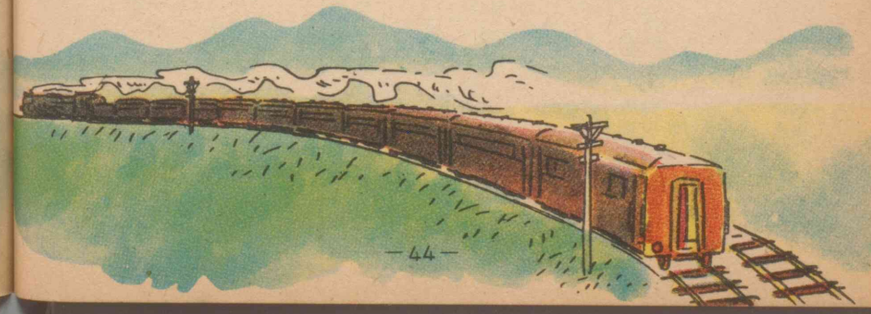
けれども―。」
おとうさんは、旅行をしていられるのでした。おじさんがアメリカへいく前に、ぜひ、会っておかなければならない用事があるというのです。
「まにあうかしら。」
「ええ、すぐ、電報をうちましょう。」
おかあさんは、頼信紙につぎのようにお書きになりました。
ハヤシアスアメリカヘタツスグ　トウキョウヘイケキミ
よしこはこの電文を見て、

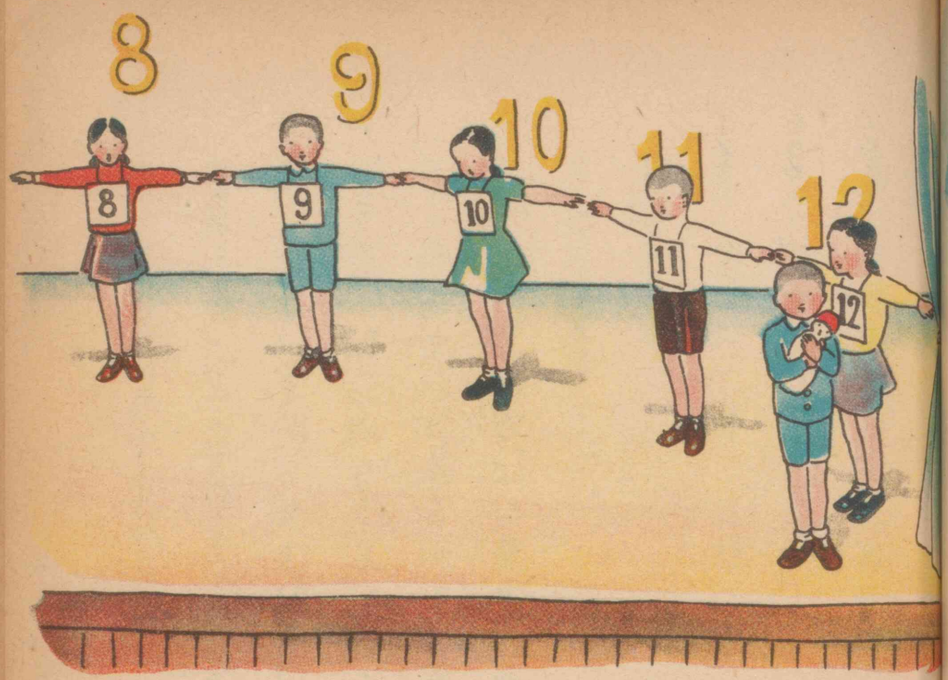
「ハヤシというのはおじさんのせい、キミというのはおかあさんのなまえ、にごりのある字の下は一字あけるのだな。」
と思いました。
「おとうさん、まにあうでしょうか。」
「だいじょうぶですよ。名古屋からですもの。」
「名古屋はずいぶん遠いんじゃない。」
「でも、急行がなん本も走っていますから――。だいみょう行列のあったころだったら、まにあいませんね。」
そういって、よしこもおかあさんもわらいました。そして、いっしょに電報を打ちにいきました。
よしこは、その日の日記のおしまいに、つぎのように書き

ました。

「こんばん、この電報を受けとられた父は、すぐ東京へおたちになるだろう。そして、あすの朝はおじさんにお会いになるだろう。おじさんは、夕方、東京をおたちになって、二日めにはアメリカにおつきになるだろう。

世の中がべんりになるにつれて、遠い所も近くなってくるような気がする。また、時間もちぢまってくるような気がする。」





(三) 時は流れる

出る人

1から12まで　十二人（き数は男子　ぐう数は女子）

せわ係

せわ係のつれてくる小学生　しんし　おじいさん

（一）

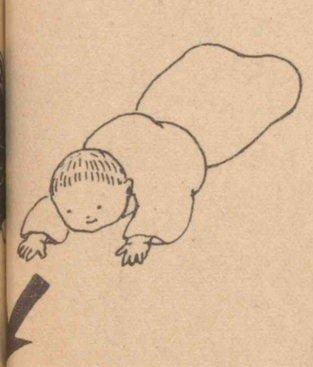
十二人が半円形になってならんでいる。

せわ係が、赤いぼうしの人形をあかちゃんのようにだいて出て来る。

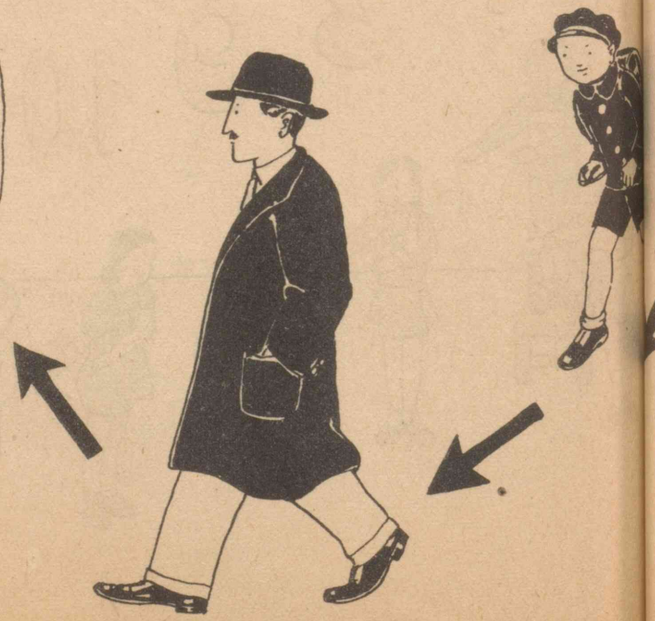
せわ係・ただいまから、よびかけ「時は流れる」の発表をしますが、その前に、みなさんにおたずねいたします。げんかんに、このあかちゃんをおわすれになった方はありませんか。心あたりの方は、至急、受付までおいでください。

（といって去る。）

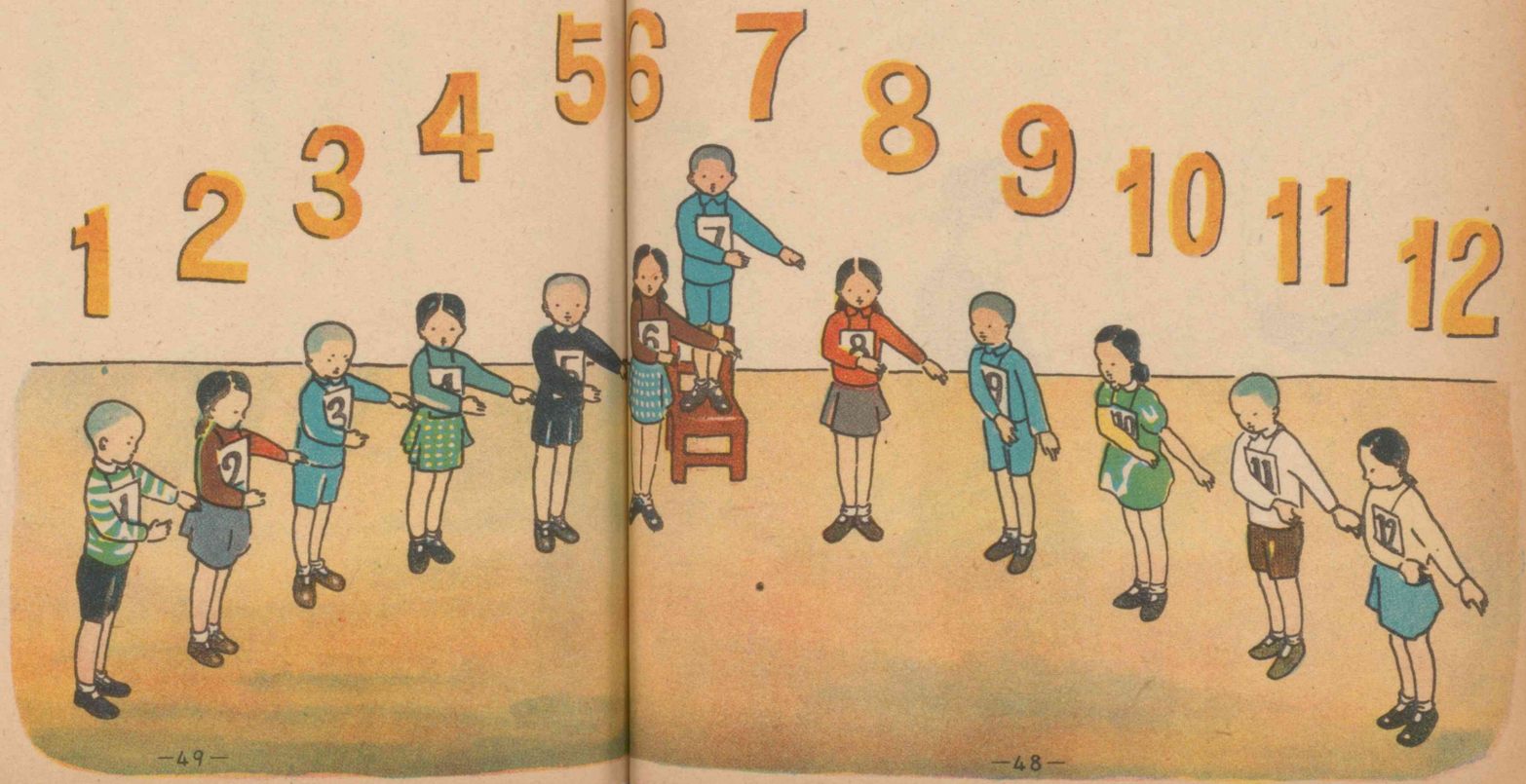
1 2 3　一秒、二秒、三秒。
4 5 6　一時、二時、三時。
7 8 9　一日、二日、三日。



10 11 12　一年、二年、三年。
女みんな十年、
男みんな百年、
女みんな千年、
男みんな万年。
1　一秒、
2　一秒。
3　時は流れる。
4　話している間も、
5　考えている間も、
6　歩いている間も、



7 ねている間も、
8 時は流れる。
9 朝は昼に、
10 昼は夜に、
11 春は夏に、
12 秋は冬に、
女みんな 時は流れる。
男みんな 時は流れる。
1 遊んでいても、
2 勉強していても、
3 働いていても、



4 なまけていても、
5 とけいは進む。
6 時は流れる。
7 じぶんの時間は、
8 じぶんで生かせ。
男みんな
女みんな じぶんで生かせ。

（二）

せわ係が小学生をつれて出て来る。

せわ係 みなさんにおたずねいたします。げんかんに、あかちゃんをおわすれになつた方はありませんか。もう、こん

なに大きくなっています。心あたりの方は、至急、受付までおいでください。（といって、小学生をつれて去る。）

1　汽車だ、時間だ、出発だ。

3　おや、ひとりたりない。

6　村野さんがいない。

7　そうだ、村野くんが見えない。

9　集まる時間をわすれたのだろう。

2　ひとりおくれて、全部がおくれる。

男女みんな　おくれる、全部がおくれる。

1　汽車の時間にまにあわない。さあ、手分けをしてさがすことにしよう。

8だけ残して、思い思いに左右に分かれて去る。

8　わたしたちの会を、三時から開くことにします。必ず時間を守って集まってください。

1と2が、もと、ならんでいた所にかけ足で帰って来る。

8　時間になりました。まだ、ふたりしか集まりません。五分すぎました。——三時十分。

3　（出てきて）なあんだ。たったふたりだけ、せっかく早くきたのに。

4　（走って出てきて）ああ、よかった。おくれたかと思った。

5　（出てきて、こそこそと後から4の横にならぶ。）　まだ、始まってい

ないのだね。何をしているのだろう、ほかの人たちは。

6　（6がきたのを見て）おや、きた、きた。ちこくだよ、あなたは。

5　ちこく。でも、まだ、きていない人がたくさんあるじゃありませんか。（といいながら、5の横にならぶ。）

7　みんな、早く来ればいいのに。（7がきたのを見て、）早くおいでよ。もう、三時二十分だよ。

9　なあんだ。たった二十分のちこくじゃないか。（といって、6の横にならぶ。）

10　（10といっしょに出て来る。10に）どうせ、時間どおりには始まらないよ。

そうね。あたし、そのつもりで、いつも、三十分おくれて来ることにしているのよ。

11は本を読みながら出て来る。10の横にならんで、本をポケットにしまい、知らぬ顔をしてだまっている。

そこへ、12が出てきてみんなを見わたしながらいう。

あら、まだ、始めていなかったの。わたしにかまわないで、始めてくれればよかったのに。（といって11の横にならぶ。）

では、みんなそろいましたから、ただいまから会を始めます。今、ちょうど四時です。

ぼくにだいじな時間は、

わたしにもだいじな時間。

きみがほしい時間は、

4　あなたもほしい時間。

（三）

せわ係が、かばんを持ったしんしをつれて出て来る。

せわ係　みなさんにおたずねいたします。げんかんに、あかちゃんをおわすれになった方はありませんか。このとおり、おとなになって待っています。心あたりの方は、至急、受付までおいでください。（といっていっしょに去る。）

5　時は流れる、
6　時間は進む、
7　ひとりの上に。

8　社会の上に。
9　生かして使え、
10　時間の命。

女みんな

11　時は流れる。
12　時間は進む。
1　正しく使え、
2　時間はたから。

男みんな

3　時間はたから。
4　一秒、二秒、三秒。
5
6　一秒がつみ重なって、千年になる。

7　一秒がつみ重なって、歴史になる。

8　その一秒が、今も流れている。

男みんな　その一秒が、今も。

女みんな　今も、その一秒が。

男女みんな　流れている、流れている。

せわ係が、赤いぼうしをかぶったおじいさんの手をひきながら出て来る。

せわ係　よびかけ「時は流れる」を終ります。たびたびおたずねしましたが、げんかんに、あかちゃんをおわすれになった方はありませんか。おあずかりしているうちに、おじいさんになってしまいました。心あたりの方は、至急、受付までおいでください。

三　そよ風

(一)　話しあい

かべ新聞を作ることになって、みんなでその話しあいをした。まさおが、話しあいをまとめる役に選ばれた。

「どんな問題から話しあいを始めましょう。」

と、まさおが話をきりだすと、

「まず、じっさいに新聞を作る人をきめたらどうですか。」

と、ひさしがいった。すると、

「みんなで、かわるがわる作りましょうよ。」

と、みどりがいいだした。みんなが賛成した。
「ぼくは、新聞の大きさを初めにきめたらいいと思います。それによって、書く人の数などもきまってくるでしょう。」
と、さだおがいうと、
「それは、どんな記事をどのくらいのせるか、ということできまる問題です。ですから、のせる記事のことから考えてみましょう。」
と、よしこが意見を出した。
つづいて、
「月になんどぐらい発行するつもりですか。」
「新聞のなまえを初めにきめておきましょう。」

「かべ新聞とほかの新聞とは、少しちがうと思います。ですから、よしこさんの問題を先にしてください。」
「いや、それは、記事が集まってから、編集をするときに話しあったらいい。」
「新聞ができあがったら、みんなでひひょう会をしよう。」
などと、つぎつぎに意見が出てきた。
そこで、どうまとめようかと考えていたまさおが、
「みんな、いい意見だと思いますが、問題を二つに分けて、一つは、どんなにして作っていくか。もう一つは、どんな記事をのせることにするか、話しあったらどうでしょう。」
というと、

「それがいいです。」
「賛成です。」
といって、みんながはく手をした。
まさおは、それによって話しあいを進めていった。話しあったことを、つぎのようにまとめてみた。

一　どんなにして作っていくか。
1　一週間に一回発行する。
2　大きさは、わら半紙四まいはり合わせたものにする。
3　八人ではんをつくって、はんごとにかわるがわる編集にあたる。

4　記事はみんなで書くが、のせるのせないは、その時の編集委員に任せる。
5　新聞のなまえを「そよ風」とする。
6　新聞ができたら、みんなでひひょう会をする。

二　どんな記事をのせるか。
1　私たちの問題——学校や学級におこっている問題。
2　ニュース——世の中のできごとや友だちのこと。
3　研究——調べたり、考えたり、読んだりしたこと。
4　作文——あまり長くないもの。
5　みんなに知らせたいと思うこと。
6　みんなを楽しませるもの。

まさおは、一つ一つ読みあげてから、
「これでいいですか。」
ときくと、みんなは口々に、
「はい、いいです。」
と答えた。
まさおが、話しあいの終りに、
「これで、わたしたちのかべ新聞『そよ風』が生れることになりました。みんなで力を合わせて、いい新聞に育てましょう。」
といった。
みんなは、きょうの話しあいはよくできたと思った。

(二) 編集

よしこたちのはんから編集を始めることになった。
初めに、八人で話しあってしごとの手分けをきめた。

1 記事を集めて整理をする係——よしこ きよし
2 新聞ぜんたいの組みたてをする係—さだお みどり
3 記事を書きつけていく係——さちこ かずお
4 さし絵やカットなどを書く係——けんきち まりこ

よしこときよしは、みんなの書いた記事を集めて、それを整理した。

「ぜひ、のせたいもの。できれば、のせたいもの。のせないもの。」と、三つに分けて、文章をなおしたり、見だしのことばをつけたりして、さだおたちにわたした。

さだおとみどりは、どの記事を大きくあつかうか、なにをどこにのせるか、どれにどんなさし絵やカットを入れるかをきめて、みんなにそうだんをした。

さちことかずおが、手分けをして書き始めた。

さちこは、新聞の紙にじかに書きつけていったし、かずおは、あとではり合わせる別の紙に書きつけた。ニュースなど、

時々はりかえようというのだ。

けんきちとさちこも手分けして、さし絵やカットを書きだした。

その間に、よしこときよしはつづき話を書くことにした。話がおもしろくひろがっていくように、くふうをして書いた。

おしまいに、みんなが集まって、はり合わせをしたり、白くあまっているところに短い記事をはめこんだり、まちがっている字をみつけてな

おしたりした。
だいたいの字数を数えたり、字の大きさをきめたりして書いたのだが、じっさいにはなかなかうまくいかない。書きなおしたり、はりかえたり、線をひいてくぎりをつけたり、ずいぶん苦心をした。
できあがったので、後のかべにはりだした。みんな集まってきて、
「わあ、よくできたなあ。」
といって、喜んでくれた。
あとで、ひひょう会をした。
よしこがはんを代表して、しごとの手分けや、作りあげる

までのじゅんじょなどについて報告をした。
「字が、小さすぎると思います。」
という意見もでたが、字を大きくすれば記事が少くなるし、むずかしい問題だと話しあった。
「編集で、一ばんほねのおれたことはどんなことですか。」
と、まさおがたずねると、さだおは、
「紙面をうまく使うことと、読みやすく書くことでした。」
と答えた。
つづき話は、いい思いつきだといってほめられた。
かべ新聞は一まいのものを、みんなで読むのだから、そこに注意して作らなければいけない、という話になった。

(三)　そよ風 ― 第一号 ―

学校博物館を作る

―全校自治会の話しあい―

六月十一日の全校自治会で、学校博物館を作ることに話しあいがきまりました。

学習の参考になる、いろいろな物を集めたり、調べたり、作ったりしたものを、一室にならべようという計画です。私たちの力で作る博物館です。りっぱな博物館を作るように、努力をしましょう。

私たちの問題

ニュース

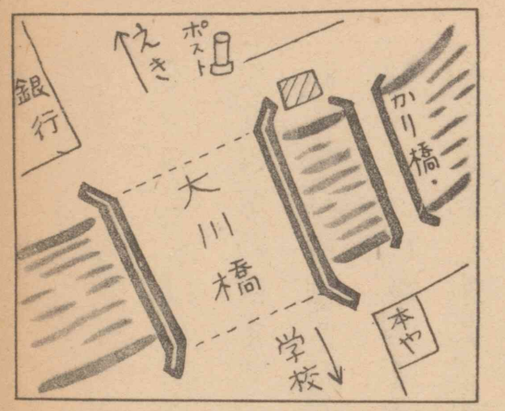
コンクリートの大川橋

―いよいよ工事にかかる―

自動車やトラックなどの交通がはげしくなったので、大川橋がコンクリートでつくりかえられることになりました。今、橋の横にかり橋がかけられています。

工事の間、馬車や自動車は川上の橋を通るのだそうです。

きのう、工事事務所にいってききますと、九月の末までにはできあがる予定だということでした。今、さかんに、鉄きんやコンクリートが運ばれています。



えらいぞ　てつおくん

てつおくんは毎朝早く起きて、道のそうじをしています。となりの家の前まで、きれいにはくそうです。

となりのおばさんが、

「ほんとうに感心です。雨の日をのぞいては、どんな朝でもそうじをします。近所でも、みんなほめています。」

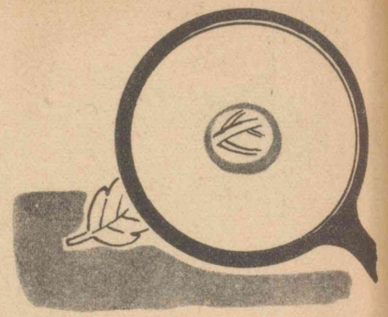
といっていました。

研究

ぼくの
けんび鏡

虫めがねに、ろうそくのろうをたらします。いっぱいたまったら、ナイフでまん中をまるくくりぬきます。そこに、スポイトでそっと水を入れます。それで、ものをのぞいてごらん、ずいぶん、大きく見えますから。

（まさお）



五分間に
なん字書けるか

わたしは、字を書くのがおそいように思います。それで、字をはやく書く練習をしています。五分間に、どれだけの字が書けるか、ためしてみました。字は、国語の本を見ながらまちがいなく書くことにし、まるも、てんも、か

ぎも一字に数えました。

第一回――八十六字　　第二回――九十七字

第三回――百二字　　第四回――百八字

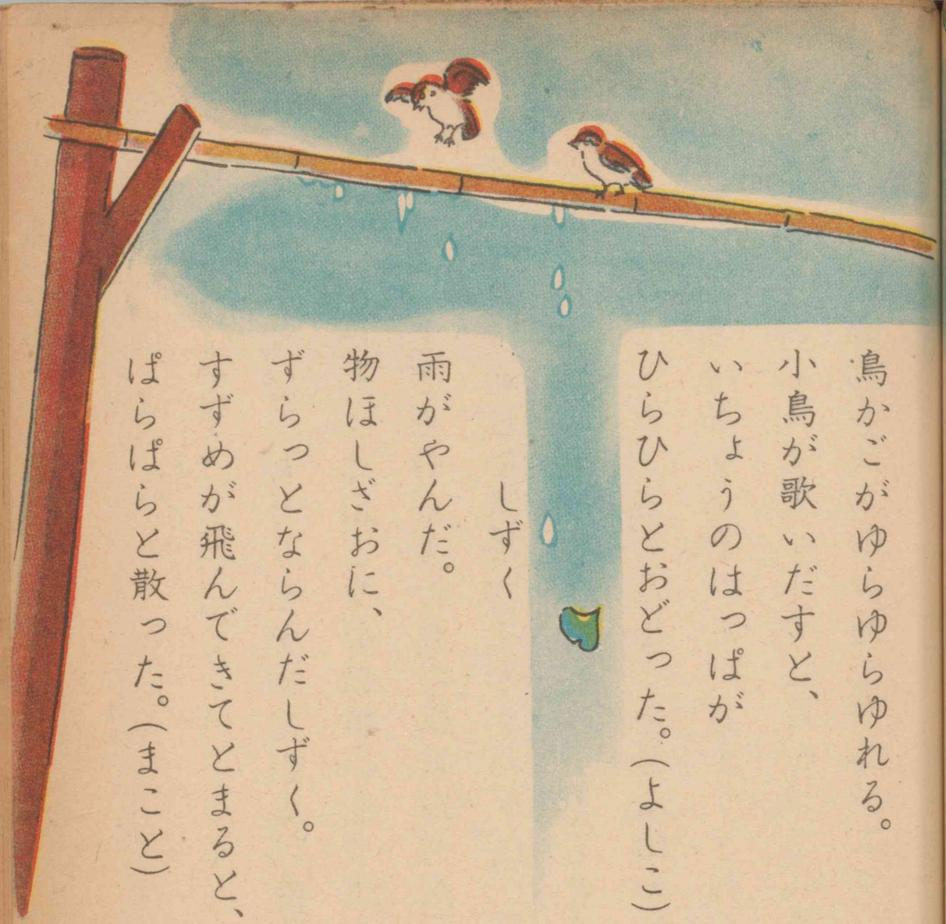
これでみると、回数を重ねるごとにはやくなってきたことがわかります。もっとはやく、正しく、きれいに、書けるようになりたいと思います。

（いねこ）

作文

鳥かご

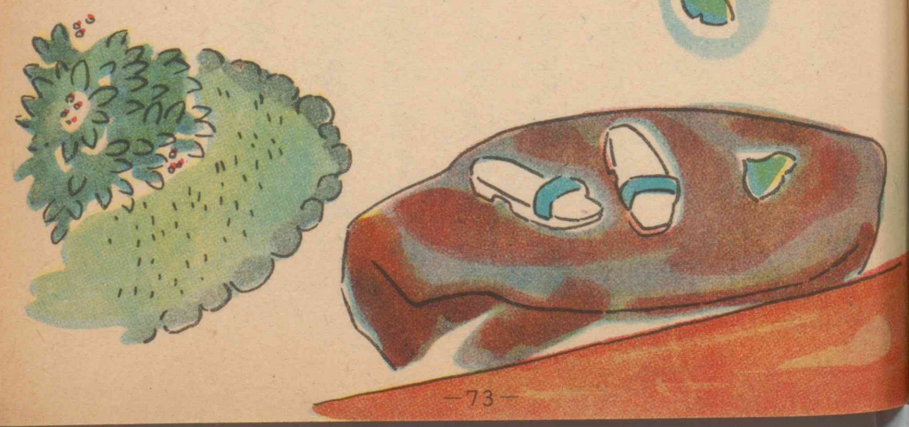
小鳥のかごを、
いちょうの木につるしてやった。
風がふくと、



鳥かごがゆらゆらゆれる。
小鳥が歌いだすと、
いちょうのはっぱが
ひらひらとおどった。（よしこ）

しずく

雨がやんだ。
物ほしざおに、
ずらっとならんだしずく。
すずめが飛んできてとまると、
ぱらぱらと散った。（まこと）



にわとり

私の家ではにわとりをかっている。白色のレグホンで、おんどりが一わ、めんどりが五わいる。ひよこから育てたのだ。

毎朝、えさをやるのが私の役目だ。だから、私がいくと、えさをもらえるかと思って大さわぎだ。私は、えさばこにえさを入れてやったり、水をとりかえてやったりする。

五月から、やっと、たまごを産み始めた。初めてたまごを産んだときはおかしかった。あまりさわぐのでいってみると、小屋のすみにたまごが一つころがっていて、にわとりは、こわいものを見るようにかたまって、こっこっと鳴いていた。

じぶんのからだから、たまごが出てきたのでびっくりしたらしい。私は、おかしいやら、うれしいやらで、うちの人たちにその話をしてあげた。

今では、一日に三つぐらいずつ産む。産んだたまごは、えんぴつで日づけを書いておく。たまごを産みだしてから、貝がらなどを喜んで食べるようになった。

ときどき、きれいなすなを入れてやる。すな浴びをさせるためだ。にわとりは、すなの中にからだを入れて、はねをがさがさいわせながら、さかんにはねの中にすなを入れたり、ねころんですなまみれになったりする。それでいて、いつも、まっ白なはねをしているからふしぎだ。（せつこ）

つづき話

海の底（第一回）

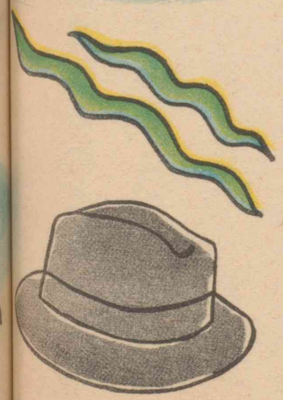
第一ぱん作

だれが落したのか、黒いぼうしが、海の底にしずんできました。魚たちは、それが人間がかぶる物だということを知らないものですから、びっくりして四方ににげました。

けれども、あばれだすようすもないので、そろそろ集まってきて、遠まきに囲みました。

「なんだろうね、あれは。」

「えらいまっ黒な魚だね。」



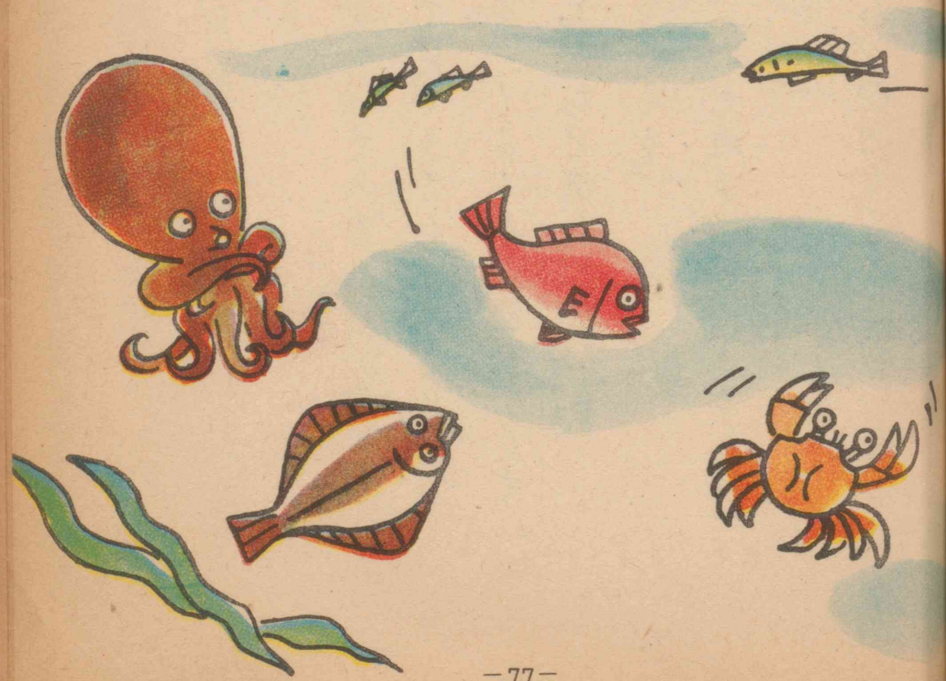
「今まで、見かけたこともないかっこうをしている。」

魚たちは、ひそひそと話しあっていました。

そこへ、かにがのっそりとはいだしてきました。

「かにさん、あれはなんでしょうかね。いましがた、上の方からゆらりゆらりとまいおりてきたんですが。」

と、たいがいいました。

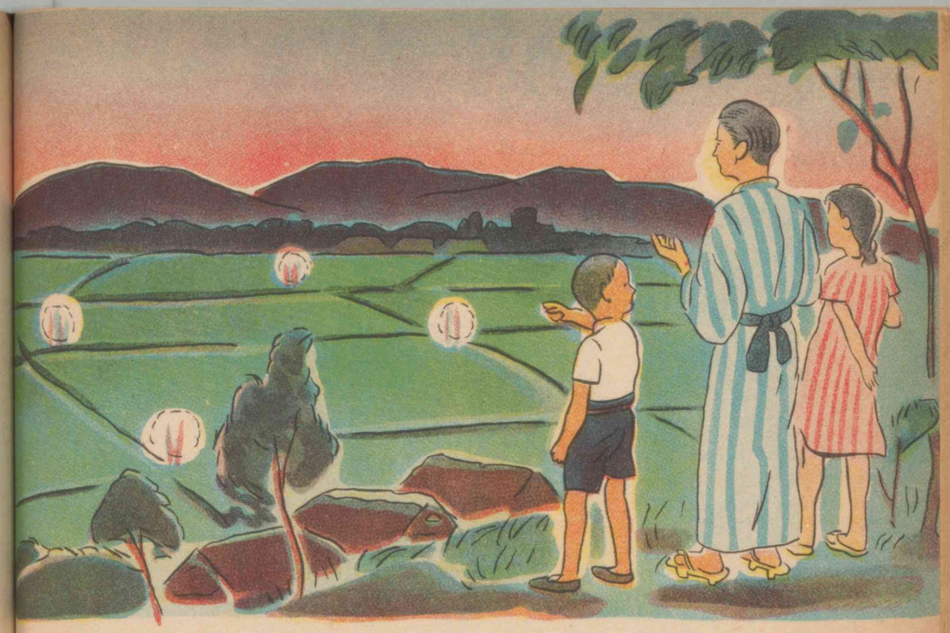


「うむ、みかけたことのない、へんな魚だな。」
かにも、とび出た目だまをぴんとたてて、あわをぽかりとふきました。
「かにさん、あなたははさみを持っているんだから、こわくはないでしょう。そばにいって見てきてくださいよ。」
ひらめが、二つならんだ目を、くるくるっと動かしていいました。かには、はさみをかちかちと鳴らしながら、
「よし、わしがいって見てきてやろう。」
といったが、それでも、こわごわと近よっていきました。
「ふふん、おくびょうものめが—。」
たこが、うでぐみをしながら、ひとりごとをいいました。

四　夏の夜

(一)　ゆうが燈

夕飯がすむと、おとうさんが、
「さあ、さんぽにいこう。」
とおっしゃいました。
まさおと姉のけいこは、おとうさんといっしょに、夕すずみをしながらさんぽに出かけました。
町はずれの、小高いおかの上に立つと、夕ぐれの田んぼが遠くひらけて、青い色の電燈がすずしそうにたくさん光って



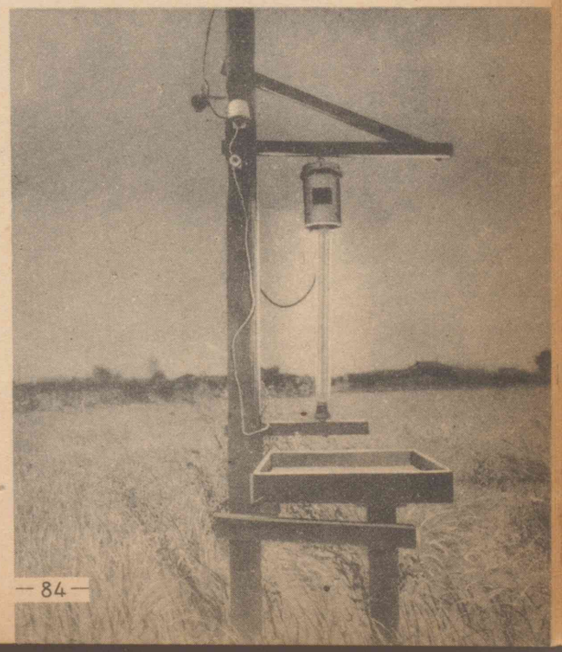
いました。
「まあ、きれい。」
けいこは思わずさけびました。
「あれは何か、知っているかい。」
おとうさんが、まさおをふりかえっておっしゃいました。
「ゆうが燈でしょう。」
「よく知っているね。」
「あれで、田や畑の害虫をとるのでしょう。」
「そうだ。汽車で旅行するとき、方

々にゆうが燈を見るようになった。日本の農業も、なかなか進歩してきたものだ。」
けいこが、
「このごろ、へやの電燈のまわりに、虫がずいぶん飛んできますね。—あれを利用したわけでしょう。」
というと、おとうさんは、
「そうだ。むかしから、『飛んで火に入る夏の虫。』というたとえもあるからね。」
とおっしゃって、ゆうが燈の発達について話をしてくれました。
「ゆうが燈というのは、ずっと前からあったものだ。もとは、

石油ランプや、カンテラのゆうが燈などが使われていた。
その前には、たいまつをたいたり、かがり火をもやしたり、あんどんをともしたりして、虫を集めたということだ。それが、電気の利用がさかんになって、あのようなしかけに変ってきた。大きな進歩だね。」
まさおが、
「そんな害虫が出ないうちに、薬をまくかどうかして、すっかりたやしてしまう方法がないものかなあ。」
というと、おとうさんは、
「それは、いろいろ研究されているさ。まさおのいうように、薬も広く使われているよ。果じゅ園などではさかんに使っ

ている。が、益虫は生かしておいて、害虫だけをたやしてしまう薬なんて、そう、かんたんにみつかるものでもなし、——今のところ、あのゆうが燈が一ばん利用されているというわけだ。まさおが大きくなったら、すばらしい研究をするんだな。」
おとうさんは、ことばをついで、
「なにしろ、日本の土地はせまい上に、たくさんの人間を養っていかなければいけないのだから、農産については、しんけんに研究しなければならないね。」
とおっしゃいました。
「あのゆうが燈は、けい光ランプという電球を使っているの

でしょう。」
けいこがいいますと、
「ほほう、六年生になると、えらいことを知っているんだな。けい光ランプだよ。けい光というのは、ほたるの光という意味だ。けい光ランプの方が、害虫の集まりがよく、その上に少い電力ですむからね。」
と、おとうさんは教えてくださいました。
まさおが、
「おとうさん、ゆうが燈のそばにいって見ませんか。ぼくは、



まだ、見たことがないんです。」
といいました。
「では、いって見よう。一番近くにあるのがいいだろう。」
おとうさんといっしょに、近くのゆうが燈を目あてにして歩いていきました。
星がきらきらとかがやいていました。遠いところのゆうが燈が、そのまま空につづいているようでした。
このごろ、ねっしんにこん虫採集をしているまさおが、
「ゆうが燈には、めずらしいこん虫が集まっているかもしれないなあ。」
と、ひとりごとをいいました。

(二)　こん虫館

すずみ台にこしかけながら、すっかりくれてしまった空を見たり、星を数えたり、遠い世界のことを考えたりするのは、一年ぢゅうでも、ほんとうに楽しい時だ。

わけても、姉といっしょに、父からなにか話を聞くのは楽しい。

父は喜んで、いつも、話をしてくれる。今夜も話をねだった。すると、

「おまえは、このごろ、虫のことについて調べているようだ

が、今、どんなことを調べているのかね。」

とたずねたので、ぼくは、

「どんなことって、はっきりいえないけれど、どんなのが益虫で、どんなのが害虫なのか、調べています。」

と答えた。

「益虫といい、害虫というのも、よく調べていくと、くべつがはっきりしなくなって、むずかしくなるだろう。自然界のことは、調べていけばいくほど、くべつがめんどうになるものだ。また、それだけに興味は深いがね。」

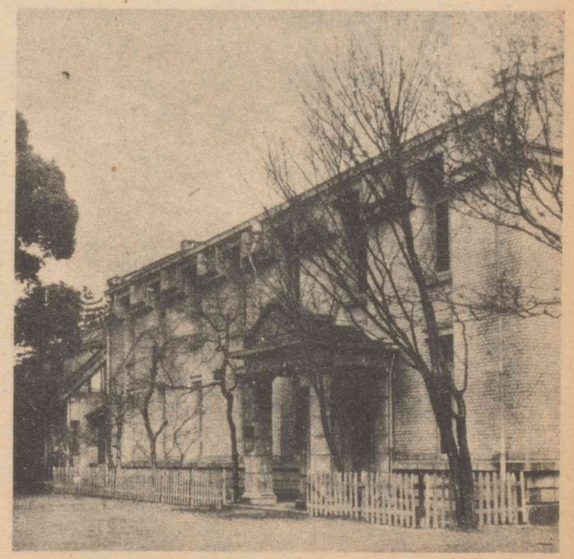
父は、こんなことから、つぎのような話をしてくれた。

「この間、岐阜に用事があって出かけたとき、ふと、思いだ

してこん虫館にたちよってみた。ちょうど、おまえぐらいの子どもが、なん人も見学にきていた。

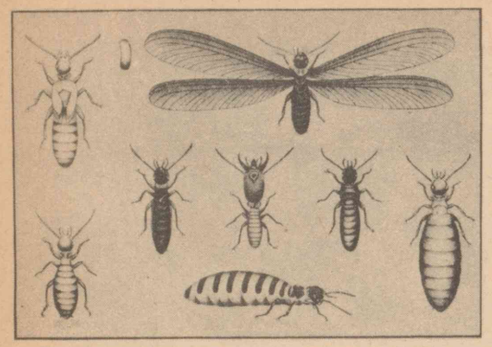
ここには、今、おまえが調べているという益虫や害虫の標本がたくさんある。また、害虫をふせぐにはどうしたらいいか、そういうことの研究も、いろいろくわしく説明がしてあった。

それから、こん虫をわかりやすいように分類してあるのが、



おとうさんにはおもしろかった。いったい、こん虫の種類はどのくらいあるか、知っているかい。……一万種だって、いや、そんなものではない。……十万種だって、どうして、どうして、そんなものではないよ。

学者によっていろいろちがうが、ある学者の説によると、動物の数は、およそ百万種、そのうち、こん虫の数は六十万種以上にのぼるということだ。それらのうちで、似かよったものを集めて分類するのだが、どのくらいに分けられると思う。ちょっとそうぞうしてみるがいい。……五千ぐらいだって、いや、も



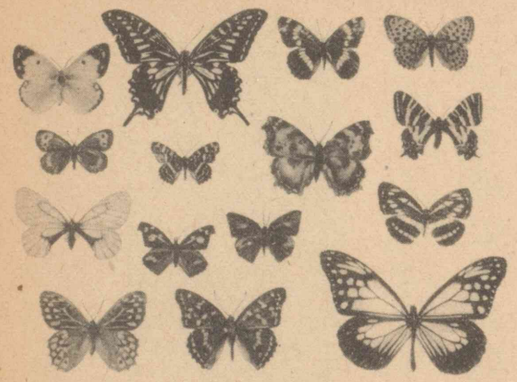
っと、ずっと少い。

ここのこん虫館では、わずか十六に分けてあった。この分け方は、学者によっていろいろにちがうが、あれほどあるこん虫の種類を、たった十六に分けたところに、おとうさんの興味があったのだ。

見学にきた子どもたちが、ねっしんにのぞいていたのは、ちょうちょの標本で、ここには、きれいなちょうちょがたくさんかざってあった。ちょうちょが草花のあたりを、ひらひらと飛びまわっているのも美しいが、

ああして、じっと動かないでならんでいるところは、また、静かで、はねの美しさがよくわかる。

標本の作り方がくわしく説明してあるので、子どもたちは、それを読んだり、書き写したりしていた。



外国のちょうちょも、たくさんならべられていたが、虫というよりは、なにか、もようでも書いたような感じがしたよ。

それから、どのこん虫はどの地方にいるとか、どのようにしてたまごからかえるとか、それがどんなにして大き

くなるかとか、そのようすがよくわかるようにしてあった。
また、近くの金華山（きんかざん）という山にいるこん虫をあつめて、大きながくが作られてあった。がくといえば、絵とか文字とかを思いだすだろうが、ここのは虫のがくだ。
おまえたちに見せたいと思ったのは、けんび鏡だった。ちようちょのはねの粉とか、かの口とか、花粉とか、いろいろなものがあるが、どれも大きく見える。おまえたちが、のぞいたら、はねの粉一つが米つぶほどに見え、こんなにも美しいものかと思うだろう。肉眼で見えないところに、ふしぎな世界のあることにも気づくだろう。」
父は、このこん虫館を建てた名和靖（なわやすし）についても、話をして

くれた。
名和靖は、一生をこん虫あいてにくらしたこと、こん虫を研究するようになったのは、かれの祖父の育てていたばらがもとであったこと、つまり、ばらがしおれてかれるのはなぜだろうと調べて、そこに、あぶら虫がいたことがわかり、それから、たんだんにこん虫の世界にはいっていったことなどを話された。

おしまいに、名和靖は、ただ、研究のためにこん虫を調べたのではなく、日本の農作物をあらす害虫を防ぐ方法を考え、ゆうが燈を用いなければなら

ないことを、すでにとなえていたこと、また、たいせつな日本の建築を白ありの害から救うために、全国をめぐって力をつくしたことも話された。

「一つの小さな観察が、大きな力を産みだし、たくさんの実を結ぶようになるのだね。」

父は、こんなことばで話を結んだ。

ぼくの調べているこん虫の世界が、ずっと広く、遠くにひらけていくような気もちがした。いつか、こん虫館を見にいきたいとも思った。

いつのまにか、夏の夜もすっかりふけて、白鳥座が頭の上にきていた。

(三) こまと星

まさおがすずみ台にこしかけていると、よしこが通りかかりました。

「どこへいってきたの。」

「この本を買ってきたのよ。」

よしこは、手に持っている本を見せました。星のことを書いた本でした。

「よしこさんは、星のことを調べているの。」

「ええ、この夏休みに、ずっとつづけて調べようと思って。」

「そう。ぼくはやっぱりこん虫だ。—よしこさんは、いつから星を調べているの。」
「この間、ざっしで、『こまと星』というお話を読んでからよ。」
「どんなお話。」
「ざっしをかしてあげるから、読んでみたら。きっと、星の世界が調べたくなってよ。」
「そう、読ましてね。——でも、ぼくたち、何もかも調べたいことばかりでこまるね。」
ふたりはわらいました。ほんとうに、考えてみれば、何から何まで調べてみたいものばかりでした。

そのころ——わたしの小学四年のころ——こまをまわして遊ぶことがはやりました。
こまの大きさは、さしわたし五センチほどで、木でこしらえたものでした。しんぼうと、わは、鉄でできていました。
まわすには、一メートル半ばかりのひもを、しんぼうのところからくるくるまきつけて、ひものはしをにぎって地べたに投げだすのです。
投げだされたこまは、はずみをくって、そのあたりを勢いよくまわります。やがて、こまはおちつくと、ひとところでからだを動かさずにじっとすわったようにまわります。

わたしたちは、この時を、
「すんでいる、すんでいる。」
といいます。
しばらくすんでいると、こまは頭をこくりこくりとふりだします。すると、よろめいてきて、くらりところげます。
友だちが、おもしろそうにこまをまわしているのを見ると、わたしもほしくなって、こまを買ってもらいました。
新しいこまにひもをまきつけて、見よう見まねで地べたに投げだしてみました。すると、まわるどころか、石ころかな

んかのようにころがり飛んでしまいました。
ひろってはひもをまき、まいては投げてみました。しかし、こまはいっこうにまわってくれません。なんのぞうさもなくまわしている友だちのこまが、ふしぎでなりませんでした。
そこで、わたしは、友だちのやり方をよく見ることにしました。
こまをまくひもでも、ゆるくまいたのではだめだということがわかりました。ひものはしを、子指にちょっとはさんで、おくこともわかりました。親指と人さし指とで、こまのわをしっかりとにぎっていて、しんぼうがまっすぐになるように、地べたにほおり投げることもわかりました。

それから、何十ぺん、こまを投げたことでしょう。投げているうちに、こまがひょいと立ちました。立って二三秒まわりました。その時のうれしさは、今もわすれることができないほどです。

それは、夕ぐれのことでした。わたしはとりつかれたように、今の手ごころを、くりかえしくりかえししてこまを投げました。弱い勢いですが、とうとう、こまはまわるようになったのです。

いつのまにか月がのぼって、うす暗い土の上で、わたしのこまは動いていました。

やがて、わたしはらくらくとこまをまわすことができるよ

うになりました。力いっぱい投げだしても、こまはころがることがなく、勢いよくまわりました。そんな時には、ブンブン、音をだしているように思われました。まわっているこまを、人さし指と中指との間でひょいとはさんで、左の手のひらにのせることもできました。手のひらで、こまのまわっている間は、ほんとうに楽しいことでした。

こま遊びには、いろいろなものがありましたが、わたしの一ばんすきであったのは、手のひらの上で、すんでまわるこまをながめることでした。もし、このこまが止まることなく、いつまでも手のひらでまわっていたらどんなだろう、どんなにおもしろいだろうと思ったことです。なんとかして、止ま

らないくふうはないものかとさえ思いました。

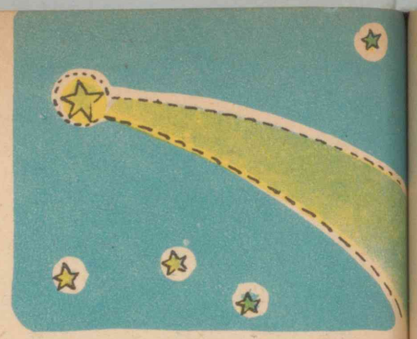
そろそろ、夏が近づいてきたころでした。

新聞に、ほうき星があらわれるという記事が出ました。小さかったわたしには、それがどんなことか、よくわかりませんでしたが、ふたりの姉たちは、そのことをいろいろ話していました。そして、ふたりともこわがっていました。

「もし、ほうき星が地球につきあたったら、どうなるかしら。」

「地球がわれてしまうのではないかしら。」

ほうき星と地球とは、どんなことになるのか、どんな関係にあるのか、わたしにはわからないだけに、ちっともおそろしいとは思いませんでした。かえって、おもしろいとさえ思



いました。

いよいよ、ほうき星のあらわれる夜になりました。ふたりの姉とならんで、わたしも見ました。ほんとうに、ほうきのような形をした白光りのするものが、暗い空にかかっていました。

「あのほうきで地球をなでられたら、わたしたちどうなるの。」

姉たちは、そんなことをいっていたようですが、その夜、あたりがたいへん静かであったことを覚えています。

まもなく、ほうき星は遠のいていきました。地球にもあたらず、ほうきでなでもしないで消えてしまいました。

そんなことから、姉たちは天体のことに心がひかれるようになりました。本を読んだり、星座を調べたりしていました。

父が、どこからか、望遠鏡をかりてきてくれました。夜になると、姉たちは、それを外に持ち出しては星をのぞくようになりました。

わたしにも星の名を教えてくれましたが、ほとんどわすれてしまいました。望遠鏡ものぞかせてくれましたが、それもどんな形であったか、どのくらい光っていたものか、わすれてしまいました。それよりも、見ようとする星を望遠鏡でと

らえることに、ほねをおったことを覚えています。

すべてわすれてしまった星の形の中で、ただひとつきおくに残っているものがあります。それは土星です。

どの星も、みんなまるい形をしているのに、土星だけは、ぼうしのつばのようなわをはめていたからです。まるで、おもちゃのようにおもしろい形をしていました。

「ねえさん、あれ、なあに。」

わたしはおどろいてたずねました。

星といえば、五角になってとがった形を考えていたのに、どの星も、まるい形をしているのを知りました。その上に、土星には大きなわがついているのですからおどろきました。

「へんなものがついているね、ねえさん。」

姉は、それについてなんと答えてくれたか、それも覚えていません。ただひとつ覚えていることは、あのつばのようなものは、小さな星がたくさんならんでいて、それがまわっているのだということです。

「まわっているんだって、ねえさん。」

「まわっているのよ。」

「いつから、まわっているの。」

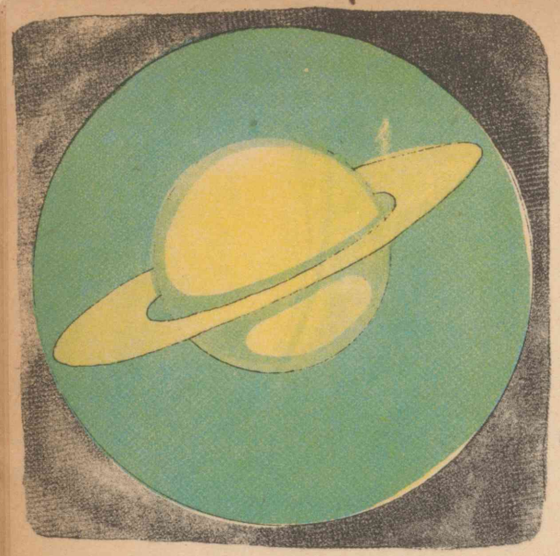
「そんなこと、わからないわ。」

「ひとりでまわっているの。」

「そうよ。」

「いつまでまわっているの。」

「わからないわ。」



わたしには、これらのことが、どうしてもわすれることのできないものでした。

そのころ、図画の時間に、わたしはこの土星を書いたことがありました。あたりをすっかりうすずみ色にぬって、

土星だけを白く残したものでした。それが、教室のかべにはりだされたので、いっそう、土星は記おくに残ったのだと思います。

わたしもだんだん大きくなって、こま遊びもやめてしまい、こまのことなどもわすれてしまいましたが、天体のことには興味をもつようになりました。

土星のわは、岩のかけらや、小石のようなものにちがいないこと、それも、氷やドライアイスでできているかもしれないことなどもわかりました。

そうして、これらの小さな星が、みんなぎょうぎよく、ぐるぐるまわっているものだということもわかりました。

天体のことを知るにしたがって、わたしの心をひいたのは、どの星も、どの星も、ほとんどまわり動いているということでした。

じぶんでまわりながら、大きなところをまわっていることもわかりました。

地球が、一日に一どじぶんでまわって、一年かかって太陽のまわりを大きくまわるように、土星もやはり地球のきょうだいで、太陽をまわっているのです。しかも、そのまわり方が、みんなきちんときまっています。

なん千という星、なん万という星が、それぞれ正しいまわり方をして動いていることには、おどろくほかありません。

こまのような、あんな小さなものを一つまわすのにも、よくなれた手つきと力がいります。たとえ、どんなに力をだしてまわしたとしても、こまは、せいぜい三十秒ほどでたおれて、止まってしまいます。

地球から遠いところにある星の中には、その光が、まだ地上に達しないものもあるといわれています。この広い天体に群がっている、いくたのものをまわしたり、動かしたりするためには、すばらしい力がなければならないはずです。

このようなすばらしい力を考えていると、わたしは、いつでも心がすんできます。

学習の仕方

四年生として、国語の学習をどのようにすすめていったらよいか、話しあいましょう。

一　明るい村

あなたの町や村の、むかしと今の生活をくらべて、考えながら学習しましょう。

三つの文が、どんなつながりをもっているか、書きぶりでどんなところがちがうかなどを、考えながら学習しましょう。

だいもくを、「明るい村」とつけたわけを考えてみましょう。

(一)　山の上で

山の上からは、どんなけしきが見えますか。

村やぶらくのなまえは、どんなにしてつけられたのでしょう。

あなたも土地のなまえの起りについて、調べたり考えたりしましょう。

この村のむかしと今では、どんなところがかわっているでしょう。

あなたも、町や村のむかしと今について話しあいましょう。

町や村をよくするためにはどうしたらよいか、まとめて話したり書いたりしましょう。

(二)　ねていて人を起すな

このお話をまとめていってみましょう。

この文を、三つに分けてあるわけを考えてみましょう。

石川力之助のえらいと思ったところを、書きだしてみましょう。

なぜ、こんなだいもくをつけたか考えてみましょう。

あなたも、町や村のためにつくした人のお話を調べたり、話をしたりしましょう。

(三)
送電線
一つ一つの文が、なにを歌った文か、だいもくをつけてみましょう。
書きぶりのおもしろいところを書きだしましょう。
この文は、「山の上で」の文のどことつながっているでしょう。
この文のだいもくを「送電線」としたわけを考えてみましょう。
電気がきてから町や村の生活について、あなたもお話したり、文に書いたりしましょう。

二
時は流れる
だいもくのわけを考えながら学習しましょう。
三つの文が、どんなつながりをもっているか、書きぶりでどんなところがちがうかなどを、考えながら学習しましょう。

(一)
なつかしい音
このお話を、まとめていえるようにしましょう。
この文の書きかたのおもしろいところはどこでしょう。
学校のようすがどんなにかわってきているか話しあいましょう。
あなたも、あなたの学校がはじめてできたころのお話をききましょう。
「時は流れる」というだいもくと、どんなつながりをもった文か、話しあいましょう。

(二)
おじさんの声
書いてあることをまとめていえるようにしましょう。
あなたも電話をかけたり、電話のことを話しあったりしましょう。
あなたも電文の書き方や、電報のうち方について話しあいましょう。
よしこの日記について、あなたの考えたことを書いてみましょう。
べんりになっていく世の中について、考えたり話しあったりしましょう。
「時は流れる」というだいもくと、どんなつながりをもった文か、話しあいましょう。

(三)
時は流れる
まとめていうと、どんなことを書いたよびかけでしょう。
(一)(二)(三) と分けてあるわけを考えてみましょう。
ひとりびとりのことばのわけを考えてみましょう。
このよびかけで、とくべつにおもしろいところはどこでしょう。それはなぜでしょう。話しあってみましょう。
あなたも、じっさいにこのよびかけをしてみましょう。
どんなにしたら、この文をうまくあらわすことができるか、ぶたいの使い方、身ぶり、どうさ、声の調子などを くふうしながらしてみましょう。

三 そよ風
ここはなんのことを書いた文か まとめながら学習しましょう。
三つの文のつながりを考えながら学習しましょう。
かべ新聞とふつうの新聞とをくらべたり、新聞のことを調べたりしながら学習しましょう。

(一)
話しあい
なんの話しあいをしたのでしょう。
話しあいをするには、どんなことがたいせつか、考えてみましょう。
話しあいをまとめるにはどんなことがたいせつか、考えてみましょう。
話しあいと、まとめたこととのつながりをみつけましょう。
こんなにまとまるまで、どんな話しあいがつづけられたのでしょう。
話しあいがよくできたわけを考えてみましょう。

(二)
編集
前の文とのつながりを考えてみましょう。

仕事の手分けと、じっさいの仕事のつながりを書きだしましょう。
話しあいできめたことが、じっさいにはどんなに進められていったか話しあいましょう。
かべ新聞の作り方のじゅんじょを、まとめて書いてみましょう。
かべ新聞を作るのにたいせつなことを考えてみましょう。

(三)

そよ風―第一号―
「話しあい」や、「編集」とのつながりを考えてみましょう。
一つ一つの記事の書きぶりや、ねうちについて話しあいましょう。
これらの記事がじっさいの紙めんの上では、どんなに組み合わされているか、考えてみましょう。
ふつうの新聞とにているところ、ちがっているところなどを書きだしてみましょう。
前の文のひひょう会のところと、照らしあわせてみましょう。
あなたも、この新聞をひひょうしてみましょう。
あなたも、かべ新聞を作ってみましょう。

四　夏の夜

あなたの生活とくらべながら学習しましょう。
夏の田畑、こん虫、空のことなどを調べたり考えたりしながら学習しましょう。
三つの文がどんなつながりをもっているか、書きぶりでどんなところがちがうかなど、気をつけながら学習しましょう。

(一)

ゆうが燈
お話をまとめていえるようにしましょう。
ゆうが燈を使うわけを書きだしましょう。
害虫をのぞくために、農家ではどんなにしてきたか話しあいましょう。
日本の国と農業のことについて話しあいをしましょう。
ゆうが燈を見たことのない人も、この文によってゆうが燈のことを話しあいましょう。

(二)

こん虫館
まとめていうと、どんなことを書いた文でしょう。
こん虫館の中はどんなになっているのでしょう。
こん虫の種類は、どの〈らいあって、どんなに分けられているのでしょう。
名和靖について感じたことを話しあいましょう。
九四ページのおとうさんのことばは、名和靖のどんなところにあたるのでしょう。
あなたもいろいろなものを集めたり、集めたことについて話しあったりしましょう。

(三)

こまと星
どんな人がこのお話を書いたのでしょう。
まとめてお話ができるようにしましょう。
こまをまわすのに、どんな手ごころがいるのでしょう。
姉たちが、天体に心をひかれたのはなぜでしょう。
作者が望遠鏡で土星をみておどろいたのはなぜでしょう。
天体のことを知るようになってから、どんなことに作者はおどろいたのでしょう。
この文で「こまと星」はどんなつながりをもっているのでしょう。
こまが「すんでいる」のと、心が「すんでいます」とのつながりを考えてみましょう。
この文を読んであなたの感じたり、考えたりしたことを書きましょう。
この本にはおもにどんなことが書かれていると思いますか。
あなたは夏休みにどんな本を読みたいと思いますか。
国語の学習ではどんな仕事をしてみたいと思いますか。

新しいことば

ページ

4 おととし　(根を)は(って)　ひと目
5 大川　ぶらく　起り
6 ふしぎ　とりかえっこ
7 (いつから)ともなく　県道　電柱
がいし　送電線
8 川上　発電所　製材所
9 正午　花火　見物
おてら　板木(ばん)　石油ランプ
ほや
10 べんり　電気　にぎりめし
なまけ(て)
11 ふもと　えがい(て)　のどか(な)
12 県ちょう　豊か　武士
ねだん　ぜいたく　役人
農民

13 収かく　へる　借金
ほとんど　たくわえ　あて
14 でき高　肥料　せい
実行
15 容易　ひがん　みぞれ
16 しぼ(んで)　成長　ききん
雨具
17 いまさら　みつめ(て)　計画
18 午前
19 つも(った)　くぼ(んで)
20 貯金　通ちょう　農業組合
すき間　ぬい方　料理
21 書物　まぬがれ(た)　たのまれ(て)
心がけ　農村
22 ひも　修理
24 屋根うら　スイッチ　ニクロム線

25 うずまき　アイロン
ズボン　しわ　とけい
時こく　ゆかい　おさらい
26 ベルト　げん米　白米
もも色
27 まるた　たくましい　まるのこ
火花　のこくず　は(ぎとる)
28 電話線　がくふ
29 正面　ふりこ　古ぼけ(た)
ひょうし木
30 むり　もくめ　黒ず(んで)
最初
31 思い出　記念　校舎
平屋
32 生徒　そで　すそ
33 ぞうり　小使
役目　ふさがる　悲しい
物置

34 講堂
35 開校記念日　入学　みかける
36 せんだって　見覚え　町長
二階建
37 受話器　手まねき　承知
39 飛行機　予定　けいてき
41 いく日
42 頼信紙　電文　ぜひ
43 にごり　だいみょう行列
44 ちぢま(って)
45 せわ係　き数　ぐう数
しんし　小学生
46 半円形　人形　至急
心あたり　受けつけ
47 百　千　万
50 出発　全部　手分け
51 思い思い　かけ足　せっかく
52 ちこく

53 かま(わない)
54 おとな
55 社会
56 歴史
57 かべ新聞
58 記事　発行
59 編集　意見
60 わら半紙　はん
61 委員　そよ風
63 整理　組たて　ニュース
64 カット　さし絵
65 文章　あつかう　じか
66 つづき話　はめこ(んで)
67 くぎり　苦心
68 じゅんじょ　報告　ほね
69 紙面
68 博物館　全校自治会　参考
69 工事　馬車　鉄きん

70 けんび鏡　虫めがね　ろうそく
71 ろう
72 ナイフ　くりぬ(き)　スポイト
73 練習　ためし　てん
74 かぎ　回数　鳥かご
75 物ほしざお　しずく
74 にわとり　レグホン　えさばこ
75 かたま(って)　産む
76 (すな)まみれ　貝がら
77 遠まき
78 かっこう　かに
79 いましがた　たい
78 目だま　あわ　はさみ
79 ひらめ　おくびようもの
80 ゆうが燈　夕すずみ　さんぽ
81 害虫　旅行
82 進歩　利用　発達
82 カンテラ　たいまつ　かがり火

82 あんどん　しかけ　薬
83 (た(やして)　果じゅ園
83 益虫　養(って)　農業
84 しんけん　けい光ランプ　電球
85 電力
86 目あて　意味
87 こん虫館　採集　こん虫
88 自然界　わけて(も)　今夜
89 見学　めんどう　興味
90 種類　標本　分類
91 そうぞう　説　似かよ(った)
92 草花
93 外国　もよう　地方
94 がく　粉　花粉
94 肉眼
93 祖父　あぶら虫　農作物
94 となえ(て)　建築　白あり
94 白鳥座

97 さしわたし　しんぼう　はずみ
98 勢い
98 よろめ(いて)　見まね　地べた
99 石ころ
99 子指　親指　人さし指
100 とりつかれ(た)　手ごころ　らくらく(と)
101 中指
102 ほうき星　関係　かえって
103 あらわれ(る)　なで(られる)
104 天体　(心が)ひかれて　星座
105 望遠鏡
106 きおく　土星　おもちゃ
107 つば
108 図画　うすずみ色　ぬ(って)
108 小石　氷　ドライアイス
109 ぎょうぎ
109 太陽　きょうだい
110 手つき　せいぜい

遊(4) 野(10) 容(15) 照(25) 堂(34) 円(46) 編(59) 鏡(70) 園(82) 眼(92) 岩(108)
緑(4) 菜(11) 易(15) 最(30) 覚(36) 至(46) 週(60) 練(71) 益(83) 祖(93) 氷(108)
調(5) 努(11) 具(16) 舎(31) 階(36) 付(46) 任(61) 産(74) 養(83) 防(93) 太(109)
県(7) 豊(12) 私(17) 建(31) 承(37) 百(47) 整(63) 貝(75) 味(84) 築(94) 陽(109)
柱(7) 武(12) 計(17) 徒(32) 予(39) 万(47) 章(64) 囲(76) 採(85) 観(94)
製(8) 収(13) 貯(20) 鳴(32) 定(39) 昼(48) 告(67) 燈(79) 然(87) 察(94)
材(8) 借(13) 業(20) 番(32) 務(39) 進(49) 第(68) 飯(79) 興(87) 結(94)
変(8) 返(13) 理(20) 悲(33) 底(40) 部(50) 博(68) 害(80) 標(88) 勢(97)
午(9) 肥(14) 夫(21) 置(33) 報(42) 必(51) 館(68) 利(81) 類(88) 弱(100)
板(9) 料(14) 修(22) 久(34) 係(45) 歴(56) 参(68) 薬(82) 似(89) 消(104)
油(9) 合(14) 湯(24) 講(34) 半(46) 史(56) 末(69) 果(82) 粉(92) 角(105)

本書の中、とくに新しく執筆を依頼したものは次の通りである。

時は流れる　栗原一登
こまと星　石森延男

さし絵

関合正明　楢原健三
浜野正義　堀内規次

そうてい

河野鷹思

小国426　新国語　上　四年　風よそ

昭和二十五年九月十四日印刷
昭和二十五年九月十八日発行

定価五十円五十戔

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE SEP. 14, 1950)

著作者　垣内松三
八木橋雄次郎

発行者　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
光村図書出版株式会社
代表者　大江恒吉

印刷者　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
株式会社光村原色版印刷所
代表者　光村利之

発行所　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
光村図書出版株式会社

4

上

なまえ

広島大学図書
0130449752

文庫
050
9752

光村図書出版株式会社